

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02618

研究課題名(和文)主観性に基づく言語の類型化と他の言語類型との相関に関する認知類型論的実証研究

研究課題名(英文) Subjectivity-based language typology and its correlation with other language typologies: A cognitive-typological research

研究代表者

上原 聡 (Uehara, Satoshi)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：20292352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本語に多く見られ特徴的とされる「主観的」な言語表現の研究の成果を、個別言語の類型的特徴づけ・多言語の類型化を行う言語類型論の研究(例：語順類型)の中に、主観性類型として位置づけた。認知言語学のsubjectivity理論の観点から、多言語間の類型論的分析を可能とする定義及びその下位分類、近似表現との異同の明確化等の理論構築を行った。それにより日本語の現象と比較しつつ他言語にどのような主観性表現がどの程度その言語の文法として言語慣習化しているかについて分析を行なった。その結果、日本語と同じ類型に属し同程度の主観性表現の体系を有する言語は朝鮮語等、数言語に限定されていること等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで語順類型等いわば客観的事象の表現形式の言語間差異を取り上げてきた言語類型論に、主観性表現による言語類型の方法を提案しその研究を行った。主観性表現の類型論的特徴を明確にし、日本語と同じ類型に属し同程度の主観性表現の体系を有する言語は数言語に限定されていること等を明らかにした。今後さらに対象言語を増やし主観性表現による言語類型を精緻化することにより、言語のより詳細でより多様な類型化が可能となる。

また、主観性表現に関して日本語と他の類型に属する言語間の自然な(非)対応関係のパターン化は、(機械)翻訳上・言語教育上・言語政策上の意義が大きい。

研究成果の概要(英文)：This study has re-examined the research outcomes on the so-called “subjective” expressions, which are known to abound in, and be one of the characteristics of, the Japanese language, and upgraded them into the study of “subjective typology” in the research field of Linguistic Typology, which specializes in characterizing and typologizing the world languages. It has devised the theoretical constructs necessary for cross-linguistic study, such as the definition and subtypes of subjective expressions to identify them among similar expressions. With such theoretical constructs, it has also analyzed languages as to which languages possess which subtypes of subjective expressions and made many research findings including the one that Korean is one language whose system of subjective expressions is similar in type and structure to that in Japanese, but that such languages are rather limited in number.

研究分野：言語学

キーワード：主観性 主体性 認知言語学 言語類型論 アジア言語

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 言語表現の主観性、またそれに基づく特定言語の主観性については、研究者間・言語間・訳語間で指示内容が異なることが多い。よって同じ言語学領域の学会で同じ「主観性」という言葉を使った発表でも、全く異なる事象を対象とする場合もある。英語の *subjectivity* の場合もその訳語としての「主観性」「主体性」についても、さらには *subjectification* とその訳語「〜化」の場合も研究者間・言語間でその指示内容が異なり得る。

(2) 上の(1)により、主観性の表現の言語類型論的研究は容易ではない状況にある。極端な例としては言語表現の主観性の1つの解釈に、認知言語学での表現の意味は話者／概念化主体のその時々への捉えを表すものであるゆえ全ては主観的であるというものがあるが、その解釈での言語対照研究の意味はない。また類型論的な研究には多言語の記述文法書が欠かせないが、記述文法書にも文法のいわゆる客観的な面における記述はあるが、主観的な面での言語現象／語彙化・構文化のパターンの記述はまとめて記述されたものではなく、記述のない場合もある。そういったことから、主観性の言語表現の対照研究は、日英対照の研究に限られている。他言語の研究は、各研究者の解釈に委ねられている。

### 2. 研究の目的

(1) 言語表現の意味は言語主体の捉えであるとする認知言語学の *subjectivity* 理論より始め、言語の主観性に関わる理論の指示内容を検討及び分類し、それらの中から言語間差異に関わる言語類型論的研究に必要な主観性表現の定義・基準を認定・明確化する。

(2) その主観性表現の定義に基づく言語表現及び言語現象を対象に、個別言語の研究論文やコーパス資料、インフォーマント、及び多言語の記述文法書の記述内容などの実際の多言語のデータにあたり、主観性表現の語彙化・構文化に関する言語間の差異及び多様性の様相の調査・分析を行う。よって主観性による言語類型の方法を提案・確立することを目指す。

### 3. 研究の方法

(1) 主観性表現の定義については言語類型論的手法、すなわち日本語の言語現象を元にした定義で始めるが、常にその定義を個別言語に見られる近似の現象と照らし合わせ異同を明確にしつつ（いわば定義と個別言語に見られる現象を行き来して）類型論的分析に応用可能なものに精緻化していく。

(2) 類型論的手法により得られた主観性表現の定義に該当する又は近似の表現及び言語現象を個別言語の詳細なデータを元に収集及び分析を行い、個別言語における主観性表現の体系化の度合の調査、その多様性における様相及び他の言語類型との相関関係の洗い出しと検証を行う。データとして対象としたのは、個別言語の記述文法書、当該の言語表現・言語現象に関する研究論文、母語話者とのインフォーマント調査結果、日本語との対訳コーパスにおける対応表現などである。

### 4. 研究成果

(1) 主体性・主観性の理論的な面での研究成果として、ラネカーの *subjectivity* 理論を、ラネカー自身の議論および対象とした言語現象に基づいて、通言語的な観点から再検討したことが挙げられる。それにより、言語類型論的に見るべき言語現象は大きく2種類に分類できることを確認し（それが日本語における「主体性」か「主観性」かについては研究者により異なる）、*subjectification* についても通時的変化としての文化化にかかわる「主観化」と、必ずしも通時的変化に関わらない「状況没入」に分けて整理・検討した。さらに、主観性の言語表現を、概念内容（事態内容）に基づくのではなく、各言語における語彙化（‘lexicalization patterns’: Talmy 1985）・構文化等の言語慣習化の結果によるものと明確に定義することにより、言語類型化の元になる言語データ収集の対象を明らかにした。

ラネカーの *subjectivity/subjectification* 理論の通言語的・通時的観点からの整理・検討については自身も執筆した論文を含む共編著論文集『ラネカーの(間)主観性とその展開』を完成させ出版した。海外の研究機関からの招聘を受け、研究成果の発表・議論も行った。

(2) 上記、類型論的分析に応用可能な主観性表現の定義に基づき、日本語を中心にそれとの対照的な観点から個別言語のコーパス分析、また多言語のアジア諸言語を中心とした記述文法書等の資料分析を行なった。主観性表現かそれに関連・近似する表現として対象とした言語表現及び言語現象は以下の通りである：内的状態述語、いわゆる人称制限、人称表示、代名詞／人称詞の省略／非明示、直示移動、恩恵構文、主観／仮想移動表現、*subjective change expressions* (Matsumoto 1996)、受動表現、敬語、証左詞。それらを主観性表現、あるいは近似の他の表現の中に位置づけ、また下位分類を行なった。

(3) 日本語の内的状態述語のいわゆる「人称制限」については、本研究ではそれは「人称」制限ではなく「体験者-概念化者一致制約」(以下「体験者制約」)であるとしているが、多言語を対象とした類型論的研究を行なった本研究においても確認できた。人称表示を持つ代名詞省略型言語においても一人称は客体化されていると考えられ、人称はむしろ体験者制約の対極にあるものと結論づけた。また、体験者制約はそれが語彙的に見られる現象として一般的に言及され本研究でもそれを中心に資料収集したが、語彙的に現れる言語(日本語、韓国朝鮮語など)ではないが、構文的に見られる言語(中国語、タイ語など)もあり、体験者制約を語彙化する言語と構文化する言語、無標と有標で捉えることができることを指摘した。

(4) 内的状態述語について地域・系統的に偏らない120の言語の文法書を文献資料として各言語の文法記述での体験者制約の有無を調べ、以下の結果が得られた:1)体験者制約現象と近似で(可能性として歴史的な関連性が)ありながら本研究の主観性表現の定義上は異なるものと位置づけるべき言語現象が数種認定できること、より具体的には2)内的状態述語の一つとした意図表現については、他の表現には体験者制約が見られない言語においても制約の現象が見られることがあり、その概念内容そのものに制約現象の動機付けがあり本研究の言語の主観性の傾向には関わらないと特徴づけできること、3)直接経験を表す証左詞やモダリティのマーカールなどは体験者制約に近似するが類型論的に有標形式となっており、体験者制約とは異なるものと位置づけられること。また、4)体験者制約は、風間(2013)によるアルタイ型言語の研究によって指摘された数言語以外には少なくとも文法記述上には見られず、それらはSOV語順・人称区別なしのタイプの言語に偏っていること(この点は次の(5)も参照)。

(5) トルコ語の内的状態述語の体験者制約に関する調査を行なった。体験者制約は動詞に人称変化の無い言語に特徴的であるという仮説の反例としてトルコ語(人称変化あり)を挙げる先行研究があり、トルコ語の文献調査及び母語話者のインフォーマント調査を行った。その結果、トルコ語の体験者制約とされる現象は日本語のそれとは大きく異なるものであり(3人称が無標となる等)、当該の主観性に関わる現象と人称区別との関係性について再考の必要があることを明らかにした。

(6) 上記(3)-(5)をまとめると、体験者制約その一方の対極に人称区別との連続性があり、もう一方の対極に証左詞/エビデンシアリティとの連続性が見られる。前者は事象参加者の、後者は情報取得元の、明確化のメカニズムと考えられる。

(7) 日本語と個別言語(タイ語、朝鮮語など)を詳細に分析する対照言語学的研究において、対訳コーパスなど利用し、述語の人称表示・代名詞の非明示・自称詞の種類・直示移動動詞の用法を取り上げ、それぞれ主観性に関わる言語現象としての位置付け及び相互の関連性を明らかにした。またその類型論上の意義についても指摘した。

特筆すべき点とすれば、同じゼロ代名詞(述部に人称表示なく代名詞が非明示)型言語においても、1)自称詞の非明示だけでなく明示化の要因も言語によって異なる(述部に敬語のないタイ語では丁寧度示す自称詞が明示される等)こと、2)自称詞が明示化されていてもその形式選択に主観性スケール(subjectivity scale: Langacker 1985)上の差が認められ、日タイ語間の対訳コーパスの分析でも、自称詞の形式選択の要因になっていることを指摘した。また、直示移動の「来る」を話者が対者の領域へ移動する際に使う用法は、3)これまでないとされていた言語にも言語によって程度の差はあれ認められること、4)同用法が言語特有の構造上(連結同土構文)の要因に動機づけられること。

(8) 他に、共同研究で内的状態述語の一種である感情表現について日韓中英独語間の対照言語的分析も行った。分析では人称制限以外の構造的特徴について5言語間の対照を行なったが、先行研究でも指摘されているように、日韓語と他の3言語がそれぞれ近似する、つまり共有する言語的特徴(代名詞省略・人称区別なし)の多い同じ東アジア言語でありながら中国語はむしろ英独語に近似の構造的特徴をとる(動詞語彙・使役構文の多さ、他)こと等を示した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 9件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 カウィーチャールモンコン サリンラット・上原聡	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語の授与動詞の意味拡張に関する一考察 構文的アプローチに基づくコーパス分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 スィリアチャー ロイケオ・上原聡	4. 巻 1
2. 論文標題 日タイ語の自称詞使用に関するコーパス分析 自称詞の種類とsubjectivityに注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 135-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 王安・上原聡	4. 巻 19
2. 論文標題 中国語の形容詞が持つ「主観性」を考える 性質形容詞とその重ね型を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara	4. 巻 -
2. 論文標題 Verbal Complexes in Thai	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Heiko Narrog	4. 巻 4(1): 108
2. 論文標題 Origin and structure of focus concord constructions in Old Japanese - a synthesis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Glossa: a journal of general linguistics	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://doi.org/10.5334/gjgl.629">http://doi.org/10.5334/gjgl.629</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 カウィーチャールモンコン サリンラット・上原聡	4. 巻 18
2. 論文標題 タイ語の授与動詞hayの意味拡張に関する一考察 コーパス分析に基づく構文的アプローチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 280-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 スィリアチャー・ロイケオ・上原聡	4. 巻 18
2. 論文標題 日タイ語の親族名称の用法に関する認知言語学的一考察 親族名称系自称詞に注目したケーススタディ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 293-305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Modality	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 357-378
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko & Bernd Heine	4. 巻 1
2. 論文標題 Introduction: Typology and grammaticalization	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Grammaticalization from a Typological Perspective	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Narrog, Heiko, Seongha Rhee & John Whitman	4. 巻 1
2. 論文標題 Grammaticalization in Japanese and Korean	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Grammaticalization from a Typological Perspective	6. 最初と最後の頁 166-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Satoshi Uehara and Kingkarn Thepkanjana	4. 巻 6
2. 論文標題 Internal state predicates in Japanese and Thai	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (Eds.) Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	6. 最初と最後の頁 651-676
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 上原 聡	4. 巻 1
2. 論文標題 日タイ語の聞き手領域への移動を表す「来る」表現に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中村芳久教授退職記念論文集刊行会 (編) 『ことばのパースペクティブ』	6. 最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 スィリアチャー ロイケオ・上原聡	4. 巻 17
2. 論文標題 日本語とタイ語の一人称代名詞使用に関する認知言語学的一考察－出現数の差に注目したケーススタディー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『日本認知言語学会論文集』	6. 最初と最後の頁 258-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Grammaticalization and typology	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Aikhenvald, Alexandra Y. & R.M.W. Dixon (eds) The Cambridge Handbook of Linguistic Typology	6. 最初と最後の頁 151-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Grammaticalisation	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Ledgeway, Adam & Ian Roberts (eds) The Cambridge Handbook of Historical Syntax	6. 最初と最後の頁 7-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Relationship of form and function in grammaticalization - the case of modality	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Hengeveld, Kees, Heiko Narrog & Hella Olbertz (eds) The Grammaticalization of Tense, Aspect, Modality and Evidentiality. A Functional Perspective	6. 最初と最後の頁 75-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 4
2. 論文標題 The morphosyntax of grammaticalization in Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Shibatani, Masatoshi et al. (eds) Handbook of Japanese Syntax	6. 最初と最後の頁 333-370
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko and Wenjiang Yang	4. 巻 1
2. 論文標題 Evidentiality in Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aikhenvald, Alexandra Y. (ed). The Oxford Handbook of Evidentiality	6. 最初と最後の頁 709-724
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 6
2. 論文標題 Modality in Japanese from a crosslinguistic perspective	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Pardeshi, Prashant & Taro Kageyama (eds). Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	6. 最初と最後の頁 611-634
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原聡	4. 巻 1
2. 論文標題 ラネカーのsubjectivity理論における「主体性」と「主観性」－言語類型論の観点から－	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ラネカーの(間)主観性とその展開	6. 最初と最後の頁 53-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 スィリアチャー ロイケオ・上原聡	4. 巻 17
2. 論文標題 日本語とタイ語の一人称代名詞使用に関する認知言語学的一考察ー出現数の差に注目したケーススタディー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Heine, Bernd, Heiko Narrog & Haiping Long	4. 巻 40-1
2. 論文標題 Constructional change vs. grammaticalization: From compounding to derivation	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Studies in Language	6. 最初と最後の頁 137-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/sl.40.1.05hei	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Three types of subjectivity, three types of intersubjectivity, their dynamicization and a synthesis	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Aspects of Grammaticalization: (Inter)Subjectification and Directionality	6. 最初と最後の頁 19-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Insubordination in Japanese diachronically	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Insubordination	6. 最初と最後の頁 247-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 The expression of non-epistemic modal categories	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Oxford Handbook of Mood and Modality	6. 最初と最後の頁 89-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 ナロック ハイコ	4. 巻 3
2. 論文標題 文法化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本語文法史研究	6. 最初と最後の頁 241-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野尚之	4. 巻 1
2. 論文標題 事象フレームの種類と2つの達成事象	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語学の 現在を知る26考	6. 最初と最後の頁 186-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoyuki Ono	4. 巻 1
2. 論文標題 Constructional Reduplication in Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 How to Learn? Nippon/Japan as Object, Nippon/Japan as Method	6. 最初と最後の頁 285-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 王安・上原聡
2. 発表標題 感情表現の構文パターンと感情の捉え方に見る言語表現の多様性と共通点 日韓中英独語を対象に
3. 学会等名 日本認知言語学会第20回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 スイリアチャー ロイケオ・上原聡
2. 発表標題 対訳コーパスを用いた人称詞に関する日タイ語対照研究 親族名称系対称詞に着目した一考察
3. 学会等名 第41回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 カウイーチャールモンコン サリンラット・上原聡
2. 発表標題 日本語の授与動詞の意味拡張に関する一考察 構文的アプローチに基づくコーパス分析
3. 学会等名 関西言語学会第43回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 スイリアチャー ロイケオ・上原聡
2. 発表標題 日タイ語の自称詞使用に関するコーパス分析 自称詞の種類とsubjectivityに注目して
3. 学会等名 関西言語学会第43回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 王安・上原聡
2. 発表標題 中国語の形容詞が持つ「主観性」を考える 性質形容詞とその重ね型を中心に
3. 学会等名 日本認知言語学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 カウイーチャールモンコン サリンラット・上原聡
2. 発表標題 タイ語の授与動詞hayの意味拡張に関する一考察 コーパス分析に基づく構文的アプローチ
3. 学会等名 日本認知言語学会第18回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 スイリアチャー ロイケオ・上原聡
2. 発表標題 日タイ語の親族名称の用法に関する認知言語学的一考察 親族名称系自称詞に注目したケーススタディ
3. 学会等名 日本認知言語学会第18回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 スイリアチャー ロイケオ・上原聡
2. 発表標題 対訳コーパスを用いた人称詞に関する日タイ語対照研究 親族名称系対称詞に着目した一考察
3. 学会等名 第41回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi Uehara
2. 発表標題 The cognitive theory of subjectivity and the invisible speaker in a cross-linguistic perspective: Zero 1st pronouns in English, Thai and Japanese
3. 学会等名 Japanese Linguistics Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoshi Uehara
2. 発表標題 Syntactic classification of particles in Japanese and how to teach them
3. 学会等名 Japanese Language Education Workshop (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoshi Uehara
2. 発表標題 The cognitive theory of subjectivity and the invisible speaker in a cross-linguistic perspective: Zero 1st pronouns in English, Thai and Japanese
3. 学会等名 Linguistics Seminar (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Kuteva, Tania, Bernd Heine, Bo Hong, Haiping Long, Heiko Narrog, Seongha Rhee	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 644
3. 書名 World Lexicon of Grammaticalization. Second edition	

1. 著者名 Narrog, Heiko & Bernd Heine	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 496
3. 書名 Grammaticalization from a Typological Perspective	

1. 著者名 中村芳久・上原聡	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 363
3. 書名 ラネカーの(間)主観性とその展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	Narrog Heiko  (Narrog Heiko)  (40301923)	東北大学・文学研究科・教授    (11301)	
研究分担者	小野 尚之  (Ono Naoyuki)  (50214185)	東北大学・国際文化研究科・教授    (11301)	削除:2018年3月28日
連携研究者	池上 嘉彦  (Ikegami Yoshihiko)  (90012327)	東京大学・教養学部・名誉教授    (12601)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携 研究者	山梨 正明 (Yamanashi Masaaki)  (80107086)	関西外国語大学・外国語学研究科・教授    (34418)	